

はじめに

「心電図の勉強と語学の勉強が似ているなんて、そんな話聞いたことある？」…という声が聞こえてきそうな気がします。たしかにそうですね。そんな話は今までどこにも書いていなかったのですから、無理ありません。

心電図を理解するのに、いきなり心電図を見せられても、どこから読んでいけばよいのか迷いますね。どんなふうに勉強したらよいのかもわかりません。では、短時間で確実に心電図をものにするためには、どうしたらよいのでしょうか。ここで、「語学の勉強法」の登場です。たとえば、能率よく英語の勉強するには次の4つが早道ですね。①単語の暗記、②文法の理解、③読解法を理解、そして④実践です。これを、心電図に当てはめてみましょう。まず「①単語」とは、P波やQ波、RS波など各波形のことを指します。「②文法」は少々難しそうと思われるかもしれませんが、主語や動詞、目的語などと複雑に区別したりはせず、ただ語順（PQRSTUの順序）とその形を見ていきます。「③読解法」は、心電図を正しく、かつ効率よく読むための方法です。そして「④実践」では、さまざまな症例の心電図を読んでいきます。毎日、期待に胸を膨らませて、新しい心電図を読んでみてください。本書は決して語学の参考書ではありませんから、語学の好き嫌いにかかわらず楽しく学べることでしょ。ご心配なく。

もう少し詳しく説明しましょう。P波は左右心房の興奮過程、Q波は心室中隔の興奮、RS波は左右心室筋の興奮、T波は心室筋の回復、そしてU波は心筋の外側と内側の中間にあるM心筋（mid-myocardium；中間心室筋）の回復波ですが、まずは各波を単語として覚えてみましょう。その単語を順序よく並べると文章になります。「ECG = P + Q + R + S + T + U」と覚えてください。たった6つのアルファベット。それが規則正しくリズムカルに繰り返されるのが、「正常洞リズム」という文章なのです。

しかし、ここで疑問が湧きますね。「なぜ、PQRSTUなんていうのだろうか？」って、思われたことはありませんか？理由は単純です。アイントーフェンが数学的に使われていないアルファベットのなかからPを選び、心房の興奮波を最初にP波と名付けたのです。そして後の各波形にQRSTUと名付けました。もし日本人が最初に心電図を開発したのなら、きっと別の呼び名になっていたことでしょう。「アイウエオ」あるいは「いろはにほへ」と呼んでいたかもしれませんね。

心電図は世界共通の言語です。どの国に行っても、心電図の理論は変わりません。ですから、「PQRSTU」とは、医療関係者であれば誰でも知っている心電図波形の呼び名なのです。

これから第1章、第2章…と話が進んでいくにしたがって、「心電図って、右房内で起こった電気刺激が左房に広がり、いったん房室結節で時間待ちをしてから、スピードを上げて心室中隔・心筋へと伝わっていく過程を伝えている現在形の記事なのだ」ということがおわかりになると思います。では、自分のペースで心電図の読解を始めてみましょう。

2016年 秋
高階経和

